

北海道師範塾 塾頭通信

「教師の道」

第681号 平成26年1月31日

ビブリオバトル

今、「ビブリオバトル」が教育現場に広がっているそうです（平成25年12月6日付日本経済新聞）。

「ビブリオバトル」というのは、小学生から大人まで誰でも参加が可能なコミュニケーションゲームの事で、「人を通して本を知る、本を通して人を知る」をキャッチコピーに日本全国に広がりを見せているといます。

この「ビブリオバトル」というゲームは、「ビブリオバトル普及委員会」の公式ルールによると、

- ① 発表参加者が読んで面白いと思った本を持って集まる。
- ② 順番に1人5分で本を紹介する
- ③ それぞれの発表の後に参加者全員でその発表に関するディスカッションを2～3分行う
- ④ 全ての発表が終了した後に「どの本が一番読みたくなったか？」を基準とし投票を参加者全員1票で行い、最多票を集めたものを「チャンプ本」とする。

という、いたってシンプルなものですが、単に自分の気に入った本を紹介するだけでなく、その結果が参加者の投票によって評価されるという点でゲーム性もあり、「知的書評合戦」とも呼ばれています。

この「ビブリオバトル」は、現在立命館大学の准教授（工学）をされている谷口忠大先生によって2007年に考案されたもので、その後各地に広がりを見せています。

北海道でも、「ビブリオバトル北海道」という活動母体が出来ており、北海道新聞社との共同企画による「紙上ガチンコ書評合戦」等も行われています。

今日、人々の読書離れ、活字離れがいわれて久しい中、「ビブリオバトル」の取り組みが人々の読書離れに歯止めを掛けられるか注目されます。

ところで、子ども達の読書離れは相当深刻だといわれていますが、実態はどうなのでしょうか。

子供の読書実態(5月1か月間にどの位本を読んだか)

| 区分 | 1か月の読書量 | 不読者の割合 |
|----------|---------|--------|
| 小学生(4~6) | 10.1冊 | 5.3% |
| 中学生 | 4.1冊 | 16.9% |
| 高校生 | 1.7冊 | 45.0% |

全国学校図書館協議会は毎日新聞社と共同で、毎年「5月1か月間にどんな本を何冊読んだか」といった読書実態を

把握する為、「学校読書調査」を実施しています。その結果は左表の通りで、学年が上がるごとに読書量が大きく減少しています。一方、1か月間、1冊も本を読まなかった不読者は、学年が上がるごとに増加し、高校生になると約半分は、1か月間全く本を読んでいないという恐ろしい状況となっています。

また、北海道の子ども達の読書の状況はどうかというと、全国学力学習状況調査の結果を見ると、本を読まない小学生は全国よりも若干多く、同じく中学生は若干少ないという状況ですが、小学生から中学生になると本を読まなくなるという傾向は全国と変わりません。

北海道の子ども達の読書動向(1か月に何冊ぐらい本を読むか)

| | 読まない | 1~2冊 | 3~4冊 | 5~10冊 | 11冊以上 |
|-----|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|
| 小学生 | 15.9 (11.5) | 38.9 (33.2) | 21.8 (24.5) | 13.0 (17.0) | 10.2 (13.6) |
| 中学生 | 23.3 (26.7) | 48.3 (45.6) | 16.2 (15.4) | 6.9 (6.8) | 4.9 (5.2) |

1:平成25年全国学力学習状況調査質問紙調査の結果から。

2:下段括弧書きは、全国の数値である。

何故本を読まないかといえは、多分、本を読まなくても不便はないとか、本を読む時間がないといった事が考えられますが、何より原因として大きいのは、読書習慣が身に付いていないという事だと思います。

小学校から中学校、そして高校へと上がる度に読書する子どもが減って行くというのは、子ども達の発達段階に応じて、ワクワクしたり、感動を覚えたりする様な良い本に出会わなかったせいではないでしょうか。

良書に出会わず、結果、本から離れて一生を終るというのは、大変不幸な事だと思います。また、本を読む力は、学力にも大きな影響を与える事にもなりますので、その意味でも、学校における読書指導は非常に重要です。

近年、朝読書を行っている学校が増えて来ており、読書指導への関心が高まっている事を感じていますが、今後各学校においては、そうした活動を通しての読書指導はもとより、本に対する関心だけではなく、プレゼンテーションやコミュニケーションの能力を高める為にも「ビブリオバトル」の積極的な活用について検討してみてもどうかと思います。(塾頭：吉田 洋一)